



TITLE:

静脩 Vol. 36 No. 1 (1999.6) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 36 No. 1 (1999.6) [全文]. 静脩 1999, 36(1)

ISSUE DATE:

1999-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66029>

RIGHT:



## 和算書と電子図書館

理学研究科教授 上 野 健 爾

江戸時代に和算と呼ばれる高度な数学がわが国に存在したことは関孝和の名前と共に、よく知られている。しかしながら、関孝和の著作を直接手にとって見る機会はほとんどない。まして、その後に活躍した和算家達の著作を目にする機会はなく、さらには和算のもとになった中国の数学書を目にする機会はない。このたび、附属図書館の御好意により、理学研究科数学教室所蔵の和算書と関連する中国数学書の一部が電子化されて、電子図書館の中にお目見えすることになった。特に、写本でしか伝わっていない、関孝和の弟子である建部兄弟によって完成された「大成算経」22巻が電子図書館に登場することの意義は大きい。数学教室には二つの異なる写本があるが、このうちの一つが公開される。残りもいずれ公開できることを期待したい。

和算書は大変残念なことに版本も、写本も書誌学的な研究がほとんど行われていない。和算史の底本になっている5巻本の日本学士院編「明治前日本数学史」の中におびたしく引用されている和算書の文章も、どの版からとったか分からず、研究に不便していると聞いている。大成算経も写本の系統は全くと言っていいほど解明されておらず、今後の研究が待たれる。

ところで、和算が興隆したきっかけは、16世紀になって商業活動が盛んになり、算盤が必要

とされるようになったことが大きいと言われていいる。なかでも吉田光由によって寛永4年（1627年）に「塵劫記」の出版されたことが大きい。この本は当時必要



とされる数学のすべてを網羅し、独習書としても優れていた。そのため、無数の海賊版が横行し、また多くの人に使われたために痛みが激しく、よい版本はほとんど残っていない。江戸時代「じんかう」という言葉が数学を指す言葉になってしまったことからその影響の大きさがしれよう。

しかし、真の意味で和算興隆の礎となったのは関孝和の天才による。彼は、中国の数学を参考にしながら、傍書法という、今日の言葉で言えば文字式を和算の世界にはじめて導入した。私たちは中学以来、文字を使って式を書き表すのに慣れてしまっているが、数学で文字式がはじめて導入されたのはヨーロッパで、16世紀後半のことである。それ以降、数学は急速に進展を始めた。それ以前、3世紀にアレキサンドリ

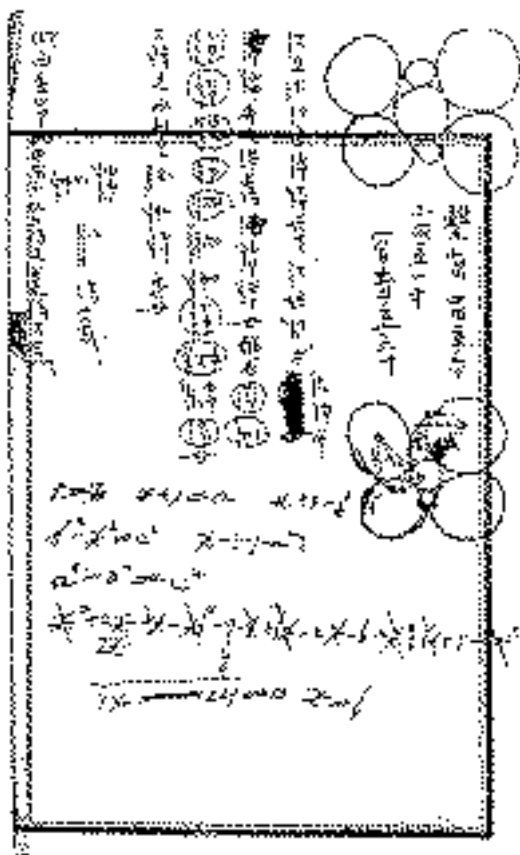
アで活躍したといわれるディオファントスが文字式の萌芽に当たる記法をはじめて用いたが、あとは続かなかった。その後、宋、元時代の13、14世紀に中国で文字式に当たる表示法が突然現れたが、なぜか中国ではそれ以上の進展がなかった。この中国数学の成果を引き継いだのが関孝和である。彼によって、中国数学を越えた進展が和算で始まった。なぜ、文字式の使用が16世紀のヨーロッパと17世紀の我が国だけで可能であったのか、ヨーロッパの文字式の使用に中国数学の影響はないのか、さらに関孝和の傍書法に西洋数学の影響はなかったのか、表面的には確かな資料は残っていないが、検討しなければならない問題は残されたままである。

和算は江戸時代に高度に発達し、行列式の導入など、我が国の和算家が世界に先駆けて行った研究も多い。しかしながら、江戸末期から明治初期に和算はヨーロッパからもたらされた数学、洋算にたちまちその位置を奪われた。附属図書館にこの辺の事情を示す興味深い資料が残されている。関流の和算家で、備後福山藩の藩

校、誠之館で明治5年まで数学の教授をした 佐藤 則義（1820 - 96）の遺著である和算書のコレクションの一部が附属図書館に保存されている。これは佐藤 則義の孫の佐藤 則之氏が1952年に附属図書館に寄贈されたものである。その中に、和算の問題を関孝和の創始による傍書法を用いた解法と洋算での解法を同じページに記したものがある。未知数を西洋風に記せばほとんどそのまま和算の論法を洋算の議論に翻訳することができたことをこの例は示している。和算から洋算への移行が比較的スムーズに行ったのは、高度に発達した和算のおかげであったことが分かる。このような貴重な資料である佐藤コレクションは保存状態が悪く、一部の本は湿気でページがくっついてしまっている。人手不足の附属図書館では補修できずにいる。資料の保存も行わなければならない附属図書館の悩みは深い。

所で、昔から数学が世界的な規模で交流していたと思われる痕跡を見いだすことは難しくない。たとえば、兼好法師の徒然草<sup>137</sup>段に「ままこだて」の話が出てくる。「塵劫記」には美しい絵入りで「ままこだて」の問題が記されている。これと同じ問題がヨセフスの問題としてヨーロッパでは知られており、10世紀の写本にこの問題が記されているそうである。この問題がどこで最初に作られ、どのような経路で伝播していったのかはいまの所不明である。我が国へは中国経由で伝わったと思われるが、不思議なことに中国ではこの問題が記された本は発見されていない。また、鎌倉時代や室町時代に、**中国数学がどの程度わが国にもたらされていた**のか、資料がなく不明のままである。数学の東西交流史に関しては、まだまだたくさんの未知の文献が眠っているようである。

話を、関孝和に戻すと彼が参考にした中国の数学書の一部は、秀吉の朝鮮出兵の際、わが国へもたらされたものであった。しかし、伝説によると孝和は奈良の寺で中国の数学書を密かに勉強したという。わが国へは古くから中国の数学書が将来されていた。中国最高の数学書と言われる祖沖子の著「綴術」（5世紀）は内容があまりに高度なため理解できる人がいなくなって



佐藤 則義 著「算法浅問抄解」（京都大学附属図書館蔵）

中国では滅んでしまった。わが国へこの本が確かに将来されたことは藤原佐理撰「日本国見在諸目録」にその名前が見いだされることから分かる。しかしながらその後は行方不明である。京都のどこかに、占いの本や暦学の本に紛れて「綴術」が今も密かに見いだされるのを待っているのではと妄想を逞しくしたくなる。

和算のことを語りすぎて電子図書館のことを

記す余裕がなくなった。電子図書館は画像だけでなくテキストデータを同時に収録すべきと思われる。しかし、和算書の名前一つをとってみても、現在のコンピュータの文字数は少なすぎて記録するのに不十分である。おまけに、外国からは日本語の表示を見ることができない場合が多い。電子図書館を云々する前に技術的に解決しなければならない問題が山積している。

## 中国古典籍のブックデザイン

人文科学研究所助手 木 島 史 雄

「ブックデザイン」と表題に記しましたが、ここでは装丁や装飾ではなく、主に書物の仕組みや働きという意味でのデザインについてお話いたします。

書物にはいろいろな接し方があります。何も「読む」ためだけのものとは限りません。辞書や電話帳、時刻表などの、「調べる」書物もありますし、内容ではなく、書き写したり、声に出して読んだりすることに価値があるとされる、お経、おふだなどの「拝む書物」もあります。書物について考えるとき、これらの「読まない」書物にも目を向けてみる必要があります。

つぎに中国の文献学の「書」と「本」の区別にも触れておきます。「書」とは、『高野聖』『歌行燈』などの、著作物の種類のことです。それに対し「本」とは、書の現実態としての版やヴァリエーションのことで、自筆原稿本／鏡花全集本などといった区別がそれに当たります。ところでそれぞれの「本」の違いは、その本が当初想定していた使われ方を反映しているということが出来ます。たとえば、携帯に便利な文庫本は、戸外で読むことをも想定しているでしょうし、大きな活字の本は、老眼鏡世代を读者に想定しているというぐあいです。そして同書異本の場合には、＜書＞ではなく＜本＞ごとの、想定されている読書環境が浮かび上がってくる

ことになります。今回は例として、古典の本文と一次注釈の双方を対象として著わされた、六世紀の古典注釈書『經典釈文』を取りあげてみます。

この書物は、中国の南北朝の末に成立したもので、『周易』『尚書』から『莊子』『老子』までの、当時の古典14種につけられた注釈全集です。そしてこの書は、文字の発音を指示することをおして、対象の文章の意味を固定し、解きほぐしてゆきます。「樂」と言う文字に、「ガク」とフリガナが振ってあればオンガクの意味であり、「ラク」とあれば（たとえば「道楽」）タノシミという意味であることがわかるという仕組みです。

さてこの書物には、＜篇章構成＞と＜文字表記＞の二つの点で、大きな特色があります。

篇章構成の特色とはこの書がどのような章立てになっているかということで、つまりはしくみといってよいでしょう。具体的には、以下の二つの篇章を挙げる事ができます。

條例＝これは現在の言葉でいえば「凡例」にあたり、書物編纂のテクニカルな方針と約束事を記した独立した手引きのことです。この條例の存在により、書物は初めて手に取る者にも使いやすいものとなるとともに、各種省略記号の使用が可能になって、重複記述のな



いコンパクトなものになるのです。

注解伝述人＝これは、それぞれの古典と注釈の来歴や著者についてのデータ、学派の盛衰などを記す一種の学術史です。これによって、『經典釈文』中で引用される先行注釈が、時代や学派の流れの中に整理配置され、古典学全体を見渡すことが可能になります。つまり文字ごとに記される個々の注釈を古典学の伝統の中に有機的に総合するものと言うことができます。

つぎに＜文字表記＞の特色に目を向けてみましょう。

摘字注釈＝この書の序に、「舊音は皆な経文の全句を録し、徒らに翰墨を煩す。今は則はち、～字を摘んで音を爲す。」とあります。注釈をつける際に、以前は、対象の古典の文章全部を引用し、その中に注釈を差しはさんでゆくスタイルでした。ですから、一つの古典について、いくつかの注釈を手元にそなえ、比較検討するときなど、古典の本文は幾度も書き写されることになって、無駄な労力を費やしていたのでした。この書では、注釈の対象となった文字だけを掲出することにより、

情報量をたもったままで、文字数を減らすことが可能になりました。

朱墨のつかいわけ＝この書の序に、「今墨をつて經本を書し、朱字もて注を辯じ、用つて相ひ分別し、較然として求む可から使む。」とあります。先にも記したように、この書は二次注釈ですから、分析対象として＜古典の本文＞と、＜一次注釈＞の二つの階層が存在しています。そこで分析対象の文字を示すときに、＜古典の本文＞には墨を、＜一次注釈＞には朱を用いたわけです。この色分けによって、経文と注釈の混淆を避けることができますし、ある文字につけられた『經典釈文』の解釈を知りたいときに、それが経文の文字であれば墨書された文字を辿るだけでよく、注であれば朱文字を辿ればよいということになります。これにより、利用するのに必要なエネルギーが大きく削減できるわけです。この表記法を伝える写本が現存しており、(図)ここでは朱字を使うかわりに文字の頭に朱点が打たれています。

以上から、『經典釈文』の特色として、まず第一に「読む」のではなく、「調べる」のに便利のようにデザインされた書物であることが明かになりました。また個別の注釈を古典学の流れの中へ位置付けようという意向を強く持っていたことも判ってきました。さらに、この書が成立した当時の、古典文献をとりまく環境として以下のことを指摘することもできます。

本文と注釈とが、別々の書であったこと  
書物の断章取義的な利用が広まっていたこと  
古典学をくくる大きなシステムが求められていたこと

そしてこの『經典釈文』という書は、成立した後も様々なデザイン改変を受けており、その広がりから、時代ごとの利用のされ方を見て取ることが可能ですし、ひいては、古典文献を取り巻く環境の変化を読み取ってゆくこともできるのです。

書物の中身ではなく、器としての性格、つまり「モノとしての書物」に目を向けてみることも、たいへん有用なことなのです。

(きしま ふみお)



フランス国立図書館所蔵  
敦煌本「尚書」舜典釋文殘卷(P.3315recto)部分

# 大英図書館と日本コレクション（講演要旨）

大英図書館日本コレクション部長 Mrs. Yu-Ying Brown

## 1. 大英図書館について

大英図書館は1985年から15年間をかけてセント・パンクラス駅の隣りに建てられた。建物は新しいが、1753年に開館された大英博物館で収集された古いコレクションがある。周囲にはビクトリア時代の古い建物があり、厳しい規制から建築者はとても苦労した。出来上がってから批判もあった。しかし、新しい建物はビクトリア調ゴシックと調和が保たれ、ユーザーフレンドリーで現在では好評である。地下4階の書庫には1200万冊が保管される。公共の費用による建築としては今世紀最大のものである。光と空気と高さで圧倒されるようなスペースが取られている。まず門を入るとウィリアム・ブレイクの画像をモデルとしたニュートンの像があり、これには人文科学から自然科学まで全てという広い意味が含まれている。エントランス・ホールにはスコットランドのタペストリーがかかっており、入ってすぐ目に付くところにキングス・ライブラリーがある。キングス・ライブラリーには6万冊の貴重図書が保管されており、また、1823年にジョージ4世によって寄贈されたジョージ3世のコレクションも入っている。1850年以前の貴重図書は「貴重本・音楽・マヌスクリプト室」で見る事が出来、部屋は光を調整して本の美しさを感じられるように設計されている。また、古い印刷物は紙の質を痛めないように画像に入れて見るようになっており、従って拡大して見ることもできる。閲覧室はどこもスペースの広さを感じさせるホワイトオークをふんだんに使用している。閲覧室は全てオープンである。椅子も全てレザーで贅沢なものになっている。カーペットは閲覧室によって色が違う。公共図書館ではないので、一般の人は利用できないが、十分な理由があれば、パスが発行される。本の検索、閲覧はコンピュータで行えるよう全てオートメーション化されてい

る。コンピュータの利用は自分のIDナンバーを入れれば利用でき、銀行でお金を出すのと同じように簡単で安全で早い。15冊まで請求出来、請求した本は約40分で手元に届く。(旧館時代は4時間かかっていた。)1年先まで予約もできる。

大英図書館は21世紀の図書館と言える。(註：UK.Weekly no.251より：大英図書館の全体像1. オープンスペース 2. エントランス・ホール 3. 展示ギャラリー 4. 書庫 5. 貴重本・音楽・マヌスクリプト室 6. 人文室 7. キングス・ライブラリー 8. オリエンタル・インドオフィス 9. 科学・技術・工業室 10. 講堂 11. その他、ギャラリー、ラウンジ、レストラン、カフェテリアがあり、蔵書数約1700万冊、総座席数1200、検索用端末50台、スタッフ2400人以上である。)

## 2. 日本コレクションについて

大英図書館は1973年に大英博物館の図書部と他の図書館の組織を集めて作った国立図書館であり、設立されるまでは、大英博物館の心臓部であった。1890年代の数年間に南方熊楠（博物学者）が人文科学から自然科学まで幅広い研究のために利用しているが、本格的に日本の研究者がきたのは1960年代からである。

大英図書館は日本の和漢書のコレクションを所蔵している。このコレクションがどんなに素晴らしいかを知ってもらうために1993年に『大英図書館所蔵日本古版本目録』を前任者の故ケネス・B・ガードナー氏が編纂・刊行した。目録の中には1700年以前に日本で刊行された本637点がリストアップされている。その中には120点の古活字版がある。たとえば、鎌倉時代、室町時代の寺院で出版された春日版・浄土教版・高野版・五山版などの古版本、勅版・キリシタン版・嵯峨本などの古活字版まで含まれている。

これらのコレクションは、ほとんど4人のコレクターから購入または寄贈されたものである。ちゃんとしたルーツによって入ってきたものばかりである。

No.1はエンゲルベルト・ケンペルのコレクション。ケンペルは有名な『日本誌』を著し、鎖国という言葉をもっと使った人である。彼が亡くなった後に大英博物館の創始者ハンス・スローン卿が彼のコレクションを買い入れた。コレクションの内容は日本関係の和書、地図、動植物標本、ケンペルの自筆原稿等である。保存状態はあまり良くないが、日本関係は完全な形で保存されている。鎖国の厳しい時代にどのようにして集めたのか。彼には日本人の助手がいた。コレクションの古文書（保証書）の中に「今村源右衛門」の名前があり、そこから、日本人の助手であることが明らかになった。

No.2はフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトのコレクション。1859年、来日の時に集めたもの1008点3441冊がある。特別に古いもの、古版本は少ない。特徴は百科全書的にカバーされており、日本の写本を集めている。写本は大英図書館所蔵の半分をしめている。尊皇攘夷に関するもの、民族学的なもの、沖縄の民俗学的なもの、美術書、植物図鑑、地図、絵巻もの等である。

No.3はアーネスト・サトウのコレクション。イギリスの外交官として1862年から1883年、1895年から1900年の2回の滞日勤務の間に収集されたものである。古版本と古活字版の宝庫であり、1600年以前の印刷によるものが含まれて

いる。これらは、90%が京都の寺町の本屋で購入されたものであり、サトウの日記等からそのことがうかがえる。ユニークな本、春日版、浄土教版、高野版、勅版、嵯峨本など主なものが揃っており、日本古典籍関係では最も重要なものである。

No.4はウィリアム・アンダーソンのコレクション。彼が明治政府のお雇い外国人として海軍医学校の教授をしていた時代に収集されたものである。日本の美術について興味を持ち、絵本、絵入り本は2000冊にのぼる。菱川師宣の『好色大和繪のこんげん』や初期の浮世絵師の筆になる絵本等すばらしいものがある。文学的なものは大英図書館に、芸術的な絵本類などは大英博物館に分けて所蔵されている。このコレクションのうち、ケネス・B・ガードナー氏の編集・刊行した目録からはずれるものについては、1700年以後の出版物を対象とする「目録」が刊行予定され、それに入るはずである。

以上、時間の関係で簡単な紹介に終わりましたが、日本の文化が如何にすばらしいものであるかを研究してもらうために「日本コレクション」が力を発揮できれば喜ばしいことだと思います。ありがとうございました。

[本稿は平成11年4月20日に大英図書館日本コレクション部長のYu-Ying Brown（ユーイン・ブラウン）女史を迎えて開催された平成11年度京都大学附属図書館講演会の要旨である。講演は日本語で行われた。]

# 附属図書館100周年

## 「『静脩』総目次」を読む

“私たちは、京都大学の図書館を、大学における教育・研究活動に対する＜支援機構＞であると自ら規定しております。”（ 1 ）との図書館の位置をあらわす言葉が、館報『静脩』に見られる。

図書館、とりわけ大学図書館の在り方・理念を考え、深化させる上での重要な要素に、利用者の要望や期待をどのように捉え、生かしていくのか、ということがひとつめにあげられるが、この場合京都大学附属図書館では図書館側と利用者側とのコミュニケーションの媒体として創刊・刊行された『静脩』があり、したがって『静脩』がその役割を充分担ってきたかについて検討することが必要だと思われる。「『静脩』総目次」を通して見るかぎりでは、この点においてはむしろ不十分ではなかったかという印象が強い。

確かに十分な時期もあった。それは、全国をあげて大学の改革が叫ばれた1968年から1970年にかけてのことであった。京都大学でも大学改革が大きく浮上し、その中で附属図書館の改革問題も例外ではなかった。従って、附属図書館への要望を含め改革の「声」が『静脩』の誌面を埋めており、その中には“昔の資料を調べてみると、今やればよいと思うことは大抵出てくるわけです。”（ 2 ）との言葉通り、附属図書館の建物構想や運営構想に関わる基本的で貴重な改革構想がしめされていたといってよい。

ふたつめに、在り方・理念を構築し、実現していくものとして、大学には「図書館商議会」がある。“附属図書館商議員会を、そうした理念を語る場としたい。”（ 3 ）との表現通り、「附属図書館商議会」は図書館職員や利用者の要望・期待を反映し、大学図書館の将来的発展に、あるいは現実の課題解決にその役割を果た

す組織であるが、こうした認識の一方で、“学内には附属図書館及び大学の図書館の在り方を議論する商議会という場はあるが、最も肝心な図書購入費の厳しいもとでは、むなしい議論となることが避けられない。”（ 4 ）といった悲嘆とでもいうべき、現状からくる対極の認識もひとり京都大学のみではなく各大学共通のものとして存在する。こうした状況のもとでは、大学図書館の活性化と地位の確立・向上を期するどころか、むしろその位置の長期低落傾向に歯止めがかからず、否、さらに加速していくのではないかと危惧さえ持つ。

だとするならば、図書館職員や利用者の「声」と図書館側との思いが一致する方向で課題の整理が行われ、施策の充実を期する努力がいつそう必要になってくるわけだが、そのためにも、「声」に対する新たな視点が『静脩』の編集に求められているのではないだろうか。

### 1 高村 仁一

「式辞」『静脩』号外（1984年4月）

### 2 西原 宏

「大学図書館の使命について」『静脩』Vol.21. No.2（1985年3月）

### 3 戒能 通厚

「名古屋大学附属図書館の将来 いかにあるべきか・ひとつの提案」『館燈 名古屋大学附属図書館報』No.128（1998年8月15日）

### 4 木村 磐根

「附属図書館商議員の役割」『静脩』Vol.32. No.4（1996年3月）

（人文科学研究所図書室 松田 博）



# ネットワーク時代の大学図書館：アメリカ大規模図書館見学記

附属図書館情報サービス課参考調査掛 山中節子

今回はスタンフォード大学について報告したが、今回はその続編としてカリフォルニア大学バークレー校、ロサンゼルス校を中心に報告したい。

## 1. カリフォルニア大学の図書館システム-MELVYL

カリフォルニア大学はバークレー校、サンディエゴ校など9つのキャンパスからなる州立大学である。

バークレー校の創立が一番古く1868年、カリフォルニア大学が1919年、最も新しいアーバイン校、サンタクルーズ校の創立は1965年である。

カリフォルニア大学ではMELVYLという巨大な図書館システムを構築している。9つの大学全体の蔵書目録や、学内者向けにカレント・コンテンツ、MEDLINEなどのデータベースが提供されている。私が訪れた昨年7月現在では、MELVYLを管理する機関はDLA ("Division of Library Automation") といった。

このMELVYLの目録は、1920年代の図書など、日本の目録では探しにくい資料を検索するときに役に立つ。もともと蔵書冊数が多いうえに、特殊言語を除いて遡及入力がほぼ終わっているのも、レコード数が多く、資料のヒット率が高い。

MELVYLには、カリフォルニア州立大学やスタンフォード大学も参加している。

各校は、MELVYLとは別に独自のローカルシステムを持っている。図書の貸出・返却、受入システム、OPAC (オンライン目録) などがローカルシステムの下で運用されている。バークレー校のOPACはGLADIS、ロサンゼルス校のOPACはORIONという。

バークレー校を例にとると、システム関係にはプログラマー、エンジニア、ライブラリアンなど約30人のスタッフが従事している。

当初、なぜ同じカリフォルニア大学で総合目録とローカル目録があるのかがよく分からなかったが、どうも日本の学術情報センターの目録 (NACSIS-CAT) と、東京大学や京都大学の各目録 (OPAC) との関係に照らし合わせて理解したら良いようだ。例えば、利用者自身が貸出更新をしたり、複写依頼したりする場合は、MELVYLではなく、各校のOPACを通じて行うことができる。

## 2. バークレー校の中央図書館

バークレーはサンフランシスコの対岸に位置する。

日本人観光客も目立つキャンパス内には、広大な敷地に様々な様式の建物が並んでいた。スタンフォード大学の統一美を見た後ただだけに、バークレー校の学部毎に異なる建物を見ると、なんだかほっとさせられた。

バークレーでは、東アジア図書館の石松久幸氏に案内していただくことができた。氏はここを訪れる日本人図書館員の案内を一手にしてくださっている。私としては、東アジア図書館だけを案内してもらったつもりだったが、こちらの意を汲んで下さったのか中央図書館や他の図書館も案内して下さった。本当に親切にしてくださいましてうれしかった。

中央図書館としては、研究図書館のDoe Libraryと学部生用図書館のMoffitt Libraryがある。他に大小様々な主題図書館が約40館ある。小規模の図書館は整理・統合していく方向にあるらしい。

Doe Libraryでは模様替えされた参考図書室と新設の地下書庫を見学することができた。

書庫には大学の構成員だけが入ることができる。地上部分は芝生になっており、外から見ると緑がまぶしかった。

地下書庫といっても自然光が入るよう工夫がされており、多数の閲覧席が設けられている。各机には電源・情報コンセントが付いている。コンピュータ化されている一方で集密書架が手動式だったのは、パークレー校らしい合理性のあらわれかと思った。

また、弱視者用に通常よりも机が高くなっている閲覧コーナーが設けられていた。閲覧室には、車椅子用に高さが調節できる端末台も設置されていた。これは日本製らしい。

書庫には、キャレルの上に6,7冊の本が置かれているコーナーがあった。これは、申し込んだら個人で決まったキャレルを占有することができる制度で、図書もそれ用に貸出手続きをすることで、机に常備しておくことができる。

参考図書室には、参考図書のほか、検索用のコンピュータ端末が50台ほど設置されていた。端末を置くにあたり、参考図書は3分の1に減らして書庫へ納められたとのことである。レファレンスの力点が冊子からデータベースに変化してきたことの一端を見た気がした。

Moffitt LibraryはDoe Libraryと地下で結ばれている。主として学部生用の指定図書とコンピュータ端末が置かれている。端末は200台ほどあるらしい。また、講習会室も別に設けられている。スタンフォード大学、パークレー校と見学してきて、研究図書館の規模の方が大きく、学部生用図書館に想像以上に本がないのに呆然とした。



Doe (Main) Library

### 3. ロサンゼルス校の中央図書館

ロサンゼルス校というより、UCLAと言った方がわかりやすいかもしれない。巨大都市ロサンゼルスの北西部、ウエストウッドという街にある。

想像通り大きな敷地で、想像以上に重厚な美しい建物が並ぶ緑にあふれたキャンパスだった。日本から持参したガイドブックには地図に「正門」と書かれていたのだが、いざ現地に着いてみると門がなかったのには驚いた。

ロサンゼルス校では東アジア図書館の三木保子氏にご案内いただいた。三木氏は中央図書館など他の図書館員の方に事前に予約をとっておいて下さり、当日はずっと付き添って下さった。こちらの身になって万全の準備を整えて迎えて下さり、とても感激した。

UCLAの中央図書館は学部生用のCollege Libraryと研究用のResearch Libraryの二つである。

College Libraryの建物は1929年にキャンパスが現在の場所に移されたときからある建物で、重厚で美しい。1994年の地震で被災し、3年間閉館していた。現在は内装なども復元され、創建当時の面影を伝えている。単に復元したのではなく、コンピュータ関連の設備を新設するなども行われた。

地上3階地下1階建てで、2階閲覧室に入るとすぐにレファレンスデスクがあり、種々の参考資料が置かれている。本がたくさんあることにわけもなくほっとした。

この閲覧室の机にも電源・情報コンセントが1席ずつに備え付けられている。書架、閲覧机、椅子、端末台などはデザインが統一されていた。

携帯用パソコンが利用できるように、閲覧机にコンセントを設けている例は、この後行ったカリフォルニア工科大学や、サンフランシスコ公共図書館のような公共図書館でも、新しい図書館では必ず見られた。そして、どの図書館でも、端末の持ち込みが可能な場所と不可能な場所が特に区別されていなかった。キーボードをたたく音などの雑音が、他の利用者の迷惑にならないのか、見学中に何ヶ所かで質問した。ノ

ート代わりに授業中も使っている学生が少なくないので抵抗感がないこと、閲覧席に余裕があり隣の音が気になりにくいことなどの理由から、特に問題はないとのことだった。

UCLAのCollege Libraryのプリンターはカードで支払う方式で、ゼロックスコピー機と共通して使用できる点が便利である。プリンターをカード支払い方式にしている例はバークレー校の分館でも見かけた。スタンフォード大学でもそうだったが、無料から有料化、カード方式へ切り替える傾向があるようだった。

また、2階には5,000以上のビデオやフィルム資料を閲覧できるMedia Labも設けられている。

1階には書庫や学習室、CLICC(College Library Instructional Computer Commons) Computer Centerがある。ここでは学生がコンピュータ端末を自由に利用することができる。端末台は閲覧室と同じく別注である。赤い木製のなかなかかわいいデザインだった。3階には演習室がある。

コンピュータ関連の施設を作るに当たり、建物内に入っていた学部生に関係のない図書室や事務室は他に移動したということだった。

地下書庫の書架も閲覧室と同じデザインだった。ソファも置かれていて、学生が寝ていた。書庫でも快適な空間が演出されている。

ロサンゼルス校の閲覧室にも、車椅子用に高さが調節できる端末台が設置されていた。コンピュータ化されているといっても、従来の図書館サービスで培われてきた障害者サービスや、気持ちのいい図書館空間を作るという点がないがしろにされていない。

地下には書庫のほかに、米国内でも有数のコレクションを持つ "Film & Television Archive Research and Study Center" があり、見学することができた。いろいろと面白いお話を伺うことができたのだが、アーカイブ資料も含めて所蔵資料はまずOPACで探すと、実に何気なくおっしゃったことが印象深かった。どんな資料もOPACで検索できるというのは実に基本的なことなのだと実感した。

#### 4. 参考調査部門の利用者教育

ロサンゼルス校では、Research Libraryで参考調査部門のMarie Waters氏から利用者教育についてお話を伺うことができた。

にこやかに迎えて下さり、まず渡して下さったのは、参考調査部門のホームページのカラーコピーだった。

レファレンスカウンターは月～木曜は午前10時～午後7時、金曜日は午前10時から午後6時まで開いている。

アメリカでは専門分野毎に担当が分かれているとかねてから聞いていたが、主題別の担当者一覧を見ると、一担当者が幾つかの主題を担当している。例えば、ある人の担当は

"Comparative Literature" "Economics" "Folklore & Mythology" "French" "Philosophy"

"Scandinavian"である。案外、担当分野が広い。

利用者教育プログラムは、図書館の使い方一般を説明するもののほか、ORIONやMELVYLの基本操作、MELVYLで利用できる様々なデータベース、CD-ROM、インターネットの講習会、各クラス毎に申し込める説明会などがある。この説明会では、ORION、MELVYLなどのデモ、館内ツアーなど希望するものを選択することができる。やはり、年度当初の10月頃の申込みが一番多いということであった。

増加するデータベースに対応するのはアメリカの図書館員の方も大変のようだったが、利用者とともに学ぶという姿勢で取り組んでおられるというお話だった。



閲覧室（高さが上下するパソコン台）

## 5. 東アジア図書館

東アジア図書館は主に中・韓・日の文献を扱う図書館である。

パークレー校の東アジア図書館は、日本語資料が32万冊あり、海外の図書館では最も多い。中国語資料はハーバード大学のイエンチェン図書館に次ぐ規模である。三井文庫(江戸期版本)、村上文庫(明治期小説初版本)などの貴重資料も所蔵されている。村上文庫は早稲田大学と共同でマイクロフィルム化され市販されている。

2年後に新館を建設する予定で、寄付を募っている最中ということだった。

実はこの図書館を訪ねる時に、うかつにも持参した案内図をホテルに忘れてきてしまった。それで、仕方なくキャンパスの中をぶらぶら歩いていると見覚えのある建物の前に着いた。中国風の狛犬が入口の両脇に立っている。名古屋大学の方が館報に載せていらした写真と同じだった。それで、無事に目的地にたどり着けたことがわかった。ミーハーな選択が幸いした。

ロサンゼルス校の東アジア図書館は研究用図書館の建物内にある。日本語資料は約14万冊所蔵されている。分類は、1972年以前はハーバード大学のイエンチェン図書館分類、それ以降はアメリカ議会図書館分類が採用されている。図書館の詳細は、三木氏が『図書館雑誌』98年1月号に詳しく紹介しておられる。

当たり前といえばそうなのかもしれないが、パークレー校、ロサンゼルス校ともに、書架に中国語、ハングル、日本語文献が混配されていたのが新鮮だった。

どちらの図書館でもE-MAILでの質問がアメリカ国内だけでなく、世界中から寄せられているということだった。言葉の障壁から直接日本に問い合わせないで、アメリカに問い合わせるという例があるらしい。WWWで日本と繋がっているとはいえ、文字コードの問題もある。

ロサンゼルス校では日本語資料の目録担当者であるMarra俊江氏に、OCLC-CJKの目録作業を実際に見せていただいた。これは日韓中国語のための目録で、試みに大江健三郎で検索して下さったところ、ちょうどハングル語訳版があ



東アジア図書館(パークレー校)

った。画面には、ローマ字、漢字、ハングルが並んでいた。また、当然のように件名をきっちりとおられたのも欧米の目録らしく印象深かった。

アメリカでもWWWの発達によって、国内で得ていた情報を、直接日本に求める傾向がでてきたようだ。学術情報センターの"NACSIS Webcat"は、やはり便利とのことだった。今のところ、料金決算が難かしく、アメリカの大学との海外ILLは実現していないが、潜在的な要望はお互いに高い。

実のところ、私はこの研修に行く以前は、日本語が文字化けするなどの問題をほとんど意識していなかった。WWWで発信された情報は、国内だけではなく国外にも流れているということも、本当のところわかっていなかった。京都大学でも、電子図書館で貴重資料などを発信している。海外の日本研究者に向けてどんな情報を発信することができるのか、それを考えるためにも、海外の日本関係の図書館員との交流は大切だと感じた。

ところで、ロサンゼルス校でいただいた図書館案内には、"Japanese"の参考質問先として、東アジア図書館の三木氏の名前が明記されていた。他の大学のホームページなどでもそうだったが、各種の利用案内には、担当者の名前が明記され、分からないときにはどこへ行ったらよいかが、主題別に説明されている。利用者の視点に立って説明がなされており、見習いたい事例の一つであった。





## 法学部図書室紹介

### シリーズ「京都大学図書室巡り」

京都大学法学部は明治32年（1899）9月、京都帝国大学法科大学として創立し、大正8年5月に経済学部の分離等の歴史的経過を踏まえて、今秋には100年を迎え、記念行事等も計画されています。

法学部図書室は、法科大学が創立された時に創設された研究図書室で、現在は、整理、閲覧両掛（掛員15名）で研究・教育の一翼をにない、それに貢献すべく全力で対応しています。さらに、法学部附属国際法政文献資料センター（昭和54年設立）とも連携して集書などの各種の業務も進めています。

昭和47年、書庫の狭隘、図書室機能の充実等を考え、長年親しまれてきた赤煉瓦の2階建から、鉄筋5階建、地下2層の法経両図書室を内包する新館（法経北館）に建て替えられました。しかし、大学の敷地利用計画、多様化する業務内容にも対応すべく、法経建物の新営計画もあり、現在の法経北館もいつ迄続くか、との話もあります。

その法学部図書室は創設以来の資料の蓄積は約57万冊（和書24万冊、洋書33万冊）に至り、その資料的価値は全国でも屈指のものと評価されています。特に、第2次大戦以前の法学・政治学研究の図書資料としては、東洋一の水準といわれています。法学部における基礎資料は、教育・研究資料として最重要なものとしての日本及び外国の法令集、判例集であり、法令の改正、判例の動向を知る上で、欠くことの出来ないものです。一般的に「National Reporter System」と総称されているアメリカ各州の判

例集を含め、過去から現在まで積み重ねられてきた多様な資料は、全国的に見ても貴重なものであり、少なくとも西日本では質、量とも最高峰と言っても過言ではないでしょう。さらに、外国の学者の蒐集による多数の文庫が所蔵されています。なかでも、Thaner文庫（教会法関係の図書を中心に2600余冊）、Hatschek文庫（公法学関係の図書を中心に2100余冊）、Tuhr文庫（民法関係の図書を中心に1900余冊）が目をはきます。また、法制史関係では、例えば、江戸時代の各地の藩の法令集など多くの貴重書を所蔵しています。これら図書資料とは別に法制史関係標本類（昔使われた看板、十手、責め道具等）も貴重な物として保管されています。紹介しなければならない図書資料には枚挙がありませんが、内容的に法学部の蔵書構成をみると、単に法学・政治学のみならず、哲学・歴史学などの隣接領域の諸学問を含んでいます。経済学部の蔵書構成と併せて、両学部で社会科学関係の資料はほとんど揃っているといえましょう。

これらの図書資料は法学部閲覧掛に来館して所定の手続きを踏めば、利用が出来ます。資料にたどり着くには、全国的なネットワークで検索する方法と、従来の目録カードで検索する方法とがあります。一度ぜひ法学部図書室へ足を運んでみてください。意外な資料を手にすることが出来るかも知れませんよ。

（法学部図書室 山田 忠彦）

## 教官寄贈図書一覧（平成11年1月～3月）

身 分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
教授	横山 俊夫	二十一世紀の花鳥風月 熱き風流を語る	中央公論社	1998
教授	石田 亨	Community Computing and Support Systems	Springer-Verlag	1998
教授	星出 敏彦	基礎強度学	内田老鶴園	1998
助教授	宇任 志幸	21世紀入門	青木書店	1999
名誉教授	清水 茂	完訳水滸伝 3,4	岩波文庫	1998
助教授	稲垣 耕作	複雑系を超えて	筑摩書房	1999
名誉教授	清水 茂	完訳水滸伝 5、6	岩波文庫	1999
教授	小川 侃	Interkulturelle Philosophie und Phänomenologie in Japan	iudicium	1998
総長	長尾	<地域間研究>の試み上	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾	<総合的地域研究>を求めて	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾	小人口世界の人口誌	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾	住空間史論Ⅰ	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾	ブッシュマンの生活世界Ⅱ	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾	幼児期の他者理解の発達	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾	身体運動における右と左	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾	動物園作群の生態学	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾	The Nation and Economic Growth	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾	Analytical Background of Geomechanical Phenomena	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾	土地所有の政治史	鳳響社	1999
総長	長尾	労働・治安刑法論研究	学習院大学	1998
総長	長尾	「力強い指導者」になる46の伝言	かんき出版	1999
総長	長尾	霊長類学を学ぶ人のために	世界思想社	1999
総長	長尾	チンパンジーおもしろ観察記	紀伊国屋	1994
総長	長尾	グレートジャーニー人類400万年の旅1-5	毎日新聞	1995
総長	長尾	Society, Economics and Politics in Pre-angkor CAMBODIA	東洋文庫	1998
総長	長尾	Black Holes and High Energy Astrophysics	UAP	1998
総長	長尾	Repertory of Dutch and Flemish Paintings in Italian Public Collections	Florence	1998
教授	狹間 直樹	自立へ向かうアジア	中央公論新社	1999
名誉教授	梅本 堯夫	子どもと音楽	東京大学出版会	1999
教授	中村 良夫	研ぎすませ風景感覚 1・2	技報堂出版	1999

## 蔵書統計（平成11年3月31日現在）

部 局	受入冊数		蔵書冊数		入力冊数	
	和 書	洋 書	和 書	洋 書	和 書	洋 書
附属図書館	8,117	4,774	531,685	268,215	186,117	54,543
総合人間学部	3,108	1,585	310,223	267,824	38,793	64,610
文学部	11,774	7,036	490,008	326,671	19,293	57,635
教育学部	1,709	878	73,986	56,333	25,312	16,415
高等教育教授システム開発センター	73	283	630	566	C	C
法学部	3,416	4,407	242,516	329,487	28,177	38,250
経済学部	4,702	3,563	221,171	213,214	20,442	30,070
理学部	548	1,383	46,639	199,783	15,116	41,231
医学部	578	1,834	48,796	135,012	4,843	3,900
薬学部	206	1,185	11,785	32,011	2,666	2,073
工学部	1,604	2,842	129,717	208,050	28,934	32,096
エネルギー科学研究科	194	73	1,838	1,293	776	366
情報学研究科	429	836	11,086	51,961	151	716
農学部	1,383	1,119	165,815	142,427	15,024	7,359
農学部附属農場	0	0	586	113	6	32
農学部演習林	136	99	10,190	3,206	2,031	664
人文科学研究科	5,583	1,451	428,999	70,547	13,671	14,725
再生医科学研究科	0	1	1,825	5,639	161	263
化学研究所	79	215	7,625	32,094	1,169	4,128
エネルギー理工学研究所	2	335	4,598	15,556	594	1,706
木質科学研究科	6	68	4,967	5,074	375	496
食糧科学研究科	15	245	3,214	10,465	16	167
防災研究所	43	201	8,014	25,386	992	5,748
ウイルス研究所	0	76	484	9,991	113	1,116
基礎物理学研究所	158	1,571	8,237	72,521	1,674	18,754
経済研究所	486	248	40,254	32,879	3,672	9,584
原子炉実験所	38	631	12,588	32,005	1,021	1,637
数理解析研究所	91	712	6,337	68,205	3,842	27,745
霊長類研究所	58	352	5,725	12,654	4,414	4,062
東南アジア研究センター	677	2,722	20,270	69,331	8,066	18,246
大型計算機センター	261	264	4,850	11,155	2,439	4,517
総合情報メディアセンター	0	2	226	552	3	163
環境保全センター	21	40	616	994	246	980
放射線生物研究センター	0	299	405	1,816	213	116
超高層電波研究センター	0	38	513	2,576	1	161
医療技術短期大学部	273	82	23,703	5,562	3,406	1,324
経理部	0	0	558	0	C	C
施設部	0	0	789	69	C	C
学生部	0	0	295	166	C	C
生態学研究センター	33	49	1,777	4,493	304	1,007
人間・環境学研究科	369	1,034	4,406	10,079	3,506	8,064
アジア・アフリカ地域研究研究科	1,267	2,162	5,762	12,393	3,062	7,373
合 計	47,437	44,695	2,893,706	2,748,374	440,645	482,046
和 洋 合 計	92,132		5,642,082		922,697	



## 京都大学附属図書館創立100周年記念公開展示会 お伽草子 物語の記憶

期間：1999年11月24日(水)～12月7日(火)

会場：京都大学附属図書館展示ホール(3階)

今年は京都大学附属図書館創立100周年にあたります。

そこで附属図書館恒例の秋の公開展示会を、その記念事業の一つとして位置づけ、所蔵資料の中から「お伽草子」を展示します。

お伽草子は、室町時代から江戸初期にかけてつくられた物語草子であり、赤や黄、緑などで美しく彩色された絵付きのものも多く、鉢かづき、物くさ太郎、一寸法師、浦嶋太郎、酒吞童子などの物語は、童話や絵本、テレビアニメなどで繰り返し親しまれ、日本人共通のなつかしい物語の記憶を形作っています。

開館100周年にあたり、この物語の玉手箱を開け、教職員や学生、市民のみならず、子どもたちにも広く見てもらい、日本人の読書生活を振り返るよすがともなればと思います。

### I N D E X

和算書と電子図書館	1
中国古典籍のブックデザイン	3
大英図書館と日本コレクション(講演要旨)	5
附属図書館100周年:「静脩」総目次を読む 1	7
ネットワーク時代の大学図書館:アメリカ大規模図書館見学記 2	8
図書館の動き	12
法学部図書室紹介:シリーズ「京都大学図書室巡り」	13
教官寄贈図書一覧	14
蔵書統計(平成11年3月31日現在)	15
京都大学附属図書館創立100周年記念公開展示会	16

#### 編集後記

今年は附属図書館創立100周年にあたり、秋には記念式典、展示会が企画されており、静脩も記念特別号を発行します。常に、親しみやく、読んで図書館や資料に興味をもてるような館報を目指したいと考えています。(G)